

# 少女達の冒険譚

第1巻



## クエスト 01 猫が化けて化かすとは限らない

「大切にしてくれるのは嬉しい。でも、過保護なのはどうかと思う。  
私の道は、私が選びたい」

ステラ・テルメスはため息をつきながら棧橋に降り立った。淡い  
黄金色の髪が潮風になびく。

「はぁ……勢いで飛び出してきちゃったけど、どうしよう……。お  
金も無くなったし……。仕事を探さないと……」

辺りを見回していたステラの目に、棧橋のそばにある大きな看板  
が飛び込んできた。

『冒険者募集中！ 階段を上がって奥の大きな建物で登録を受け付  
けています』

「これだわ！」

ステラの目が輝いた。笑みを浮かべるとステラは軽い足取りで階  
段を上り始めた。

その建物は、周りの民家の倍はありそうな立派な二階建ての建物  
だった。ステラは冒険者ギルドと書かれたその建物へと入った。

「冒険者ギルドへようこそ」

ステラが建物の中へと入ると同時に、受付役の係員がステラを迎  
え入れた。

「もうすぐ説明が始まりますので、隣の大講堂へとお越しください」

「今から……ですか？」

急な提案に驚いたステラは何か言おうとしたが、遮るように受付  
がステラへと札を渡した。

「受付番号をお渡しします」

ステラは戸惑いながら 30 番と書かれた札を受け取った。

ステラは 30 番と書かれた席へと座り、隣の席に座っている人物  
——少女へと目を向けた。隣に座っている少女がステラの視線に気

づいたのか、ステラへと視線をやった。その瞬間だった。

「貴様らよく来たな！」

大講堂の一段高い場所にいたリーゼントの男が大声を上げた。リーゼントの額には青筋が浮かび、脈打っていた。ステラは慌てて前を見た。

「これから貴様らが一人前の冒険者になる試練をくれてやる！ 期限は今から 48 時間！ 期限を守れないものは今回の試験は不合格とする！」

ざわめきが大講堂を覆いつくした。ステラは隣の席の少女を見た。少女は浮足立っている周りをよそに、じっと正面を見つめていた。

「まずは、隣の席にいる者とペアになれ！ それからペアを 2 つ合わせ、4 人一組のパーティーを作る！」

慌てて冒険者志願の人々が、隣の席に座っている人間の顔を見た。

「組み合わせはこのわしが直々に選んでやる！ 感謝しろ！」

ひとしきり叫んだリーゼントは、目の前にあった箱に勢いよく腕を突っ込んだ。

「次！ 7 番と 30 番！」

リーゼントの試験官が何度目かわからない叫び声をあげた。ステラは立ち上がった。だが、もう一組のペアは立ち上がらなかった。ステラは困惑しながら 7 番の席を見つめた。

「……むっ？ 7 番のペアはどこに行った？」

試験官も異変に気付いた。

「やむおえん。おい、30 番のペアはここに残れ」

眉をひそめながら試験官はステラ達に言っていた。

「それで……もう片方のペアはどこに行ったんですか？」

不安そうにステラは聞いていた。

「うむ……門番の者によると。町の城壁から出て南東の関所に荷物を届けに行ったらしい」

「でも、ライセンス持っていないのに町の外に出していいんですか？」

ステラは試験官に尋ねていた。外の世界はモンスターが多く、町などの外に出るのは大事な用事があるものか、それなりに腕の立つものしかいないということを、ステラは昔から周りの大人達に聞かされていた。

「荷物届けるぐらいなら、冒険者になりたい人にライセンスなしでさせるってこと、結構あるわよ」

試験官が答える前に少女が答えていた。ステラは少女を驚いた表情で見ている。

「そうだお前達。後の2人と合流したらこれを渡せ」

試験官は、懐から通行手形と書かれた札を取り出し、ステラに渡した。

「えっ？ はい、わかりました」

戸惑いながらステラは通行手形を受け取っていた。

ステラと少女は冒険者ギルドの外に出た。ステラはぼんやりと少女のナチュラルブラウンのベリーショートのを眺めていた。

「あたしのことは、シェリーって呼んでね」

ステラが何か言う前に少女——シェリーが告げた。

「あっ、はい。私のことはステラって呼んでください」

言いながらステラはまじまじとシェリーを見た。へそ出し丈のキャミソールにマイクロミニのショートパンツと肘までのグローブにロングブーツという肌の露出の高い格好に、ステラは思わず目をそらしながら前に出ている。その様子を見て、シェリーは小首をかしげている。

「どしたの？」

「いえ……何でもないです」

シェリーは人差し指をこめかみに当てた。

「あたしとは、もっと気軽に話してね」



ステラは目を見張った。シェリーは笑みを浮かべていた。

町を出てしばらく歩いていると小さな関所が見えてきた。ステラは足を止めると、不安と好奇心が混ざった目で関所を見つめた。

「あれが関所？」

ステラは聞いていた。シェリーは無言で頷いていた。その時シェリーは関所から異様な気配がしているのを感じた。

「ちょっと待って」

シェリーは歩き出そうとしたステラを制していた。

「動物の声、聞こえない？」

ハッとなったステラは関所を見て、続いてシェリーを見た。シェリーは頷いていた。

関所に着くと、剣を構える黒髪の少女と小さな 2 挺の拳銃型のデバイスを構える金髪の少女が 2 頭のウルフと対峙していた。

「なんでこんなことになるのよ、ゆかり！」

金髪の少女が叫んでいた。

「しょうがないでしょ、アリシア。関所の人、みんな他のところに来ているウルフの退治に行っちゃったんだもん！」

黒髪の少女が叫び返してきた。

「大丈夫ですか！？」

ステラが叫びながら駆け寄った。2 人の少女は後ろへ振り向こうとした。

「後ろを向かないで。そのまま前を見てて！」

少女達をシェリーが制していた。ウルフがステラ達に向かってきたのはほぼ同時だった。1 頭のウルフがシェリーへ、もう 1 頭のウルフがそのまま後ろへと向かっていった。

「誰かそのウルフ止めて！」

ウルフを迎え撃ちながらシェリーが叫んでいた。ハッとなったゆかりがウルフとステラやアリシアの間に割って入った。シェリーは